

## 1 視察先及び調査事項

### (1) 新潟市（10月19日）

○「にいがた2km」における道路空間利活用について

### (2) 宇都宮市（10月20日）

○宇都宮駅東口地区整備事業について

## 2 視察結果

### (1) 新潟市

人口：768,868人

世帯数：349,214世帯

面積：726.19km<sup>2</sup>

（令和5年9月末現在 ※面積は7月1日現在）

#### 【都市の概要】

新潟市は、日本で最も長い大河・信濃川の河口に位置し、古くから「みなとまち」として栄えてきたところ、安政5年のアメリカ等5か国との修好通商条約によって、開港5港の1つに指定され、世界に開かれた港町となった。明治22年の市制施行後は、戦争、大火、地震などに見舞われながらも、その都度復興を成し発展を遂げ、平成8年には中核市に指定。さらに平成17年の近隣13市町村との合併により人口約81万人となり、平成19年には本州日本海側初の政令指定都市となっている。

高速道路網や上越新幹線により首都圏と直結しており、陸上交通網が充実しているほか、国際空港、国際港湾を擁し、国内主要都市と世界を結ぶ本州日本海側最大の拠点都市として高次の都市機能を備えている。一方、広大な越後平野では、米、野菜、果物、畜産物、花卉類などを栽培しており、農畜産物の一大産地となっている。また、信濃川、阿賀野川、福島潟、鳥屋野潟、ラムサール条約登録湿地の佐潟といった多くの水辺空間や里山などの豊かな自然に恵まれた都市でもある。

#### ○「にいがた2km」における道路空間利活用について

##### ・「にいがた2km」の概要について

新潟市の中心部に位置する、新潟駅、万代、古町をつなぐ都心軸が約2キロメートルであることから、新潟市では、その都心軸周辺エリアを「にいがた2km」と名づけ、「経済・産業の発展を牽引する成長エンジン」とするための取組を進めている。

その背景には、少子高齢化や転出超過による近年の人口減少傾向がある。仕事がないことを理由に県外へ転出する若年層が多く、雇用創出のため企業を誘致したい新潟市としては、「にいがた2km」を「緑あふれ、人・モノ・情報が行き交う活力ある

エリア」に創造しようと取り組まれている。

#### ・都心のまちづくりの基本方針等について

新潟市では、令和5年度の取組を『「にいがた2km」の覚醒』と表し、「にいがた2km」を核とした都心のまちづくりを進められている。

#### 【都心のまちづくり基本方針（三本の柱）と推進項目】

##### I 人・モノ・情報の中心拠点となる稼げる都心づくり

- ① 都市機能の更新・充実に向けた都心部の再開発促進  
(都市再生緊急整備地域の活用)
- ② 戦略的な企業誘致の推進
- ③ 産業DX、ICT推進の先進エリアとしての取り組み強化
- ④ 歴史・文化・スポーツを通じた賑わいの創出
- ⑤ 観光資源を活かした交流人口の拡大

##### II 都心と8区の魅力・強みのコラボレーションによる新たな価値の創造

- ① 「新潟の食と花」の魅力発信
- ② 「儲かる農業」の推進
- ③ 新たな価値やビジネスが創出される環境づくり
- ④ 観光資源を活かした交流人口の拡大

##### III 居心地が良く、市民が主役になるまちづくり

- ① 都心の水辺空間の魅力を十分に活かした賑わいの創出
- ② くつろげる 歩いて楽しい緑豊かな都市空間の実現
- ③ 都心における各エリアの特性を活かした良好な都市景観の形成

道路空間利活用は、IIIの基本方針における推進項目であり、新潟市では、居心地のよい滞在空間の創出とともに、多様な交通手段による回遊性の向上を図り、人に優しく歩いて楽しい「ウォーカブルな都市空間」の創出に取り組まれている。

また、「にいがた2km」における様々な取組を推進し、エリアプラットフォームなどの多様な主体によるまちづくり活動を支援することで、都市活動の活性化による新潟市全体の魅力及び価値の向上につなげようとしている。

#### ・「東大通みちばたりビング」について

新潟市では、駅前の方代地区周辺について「新潟駅・方代地区周辺将来ビジョン」を策定し、公民連携のまちづくりを推進されている。また、本年度は9月16日から10月15日までの約1か月間、道路空間利活用に係る社会実験として「東大通みちばたりビング」を実施された。

東大通は、片側4車線、延べ約150mとなる駅前のメインストリートであり、社会実験期間中は、ベンチやテーブル、テラスデッキ等が設置され、キッチンカーなどが並んだほか、9月の3連休においては各片側1車線を車線規制し、各種イベントが開催されたとのことである。

東大通での社会実験は令和4年度にも開催されており、その際は前年同月比の人流増などの効果が得られたということであるが、関係事業者が少ないなどの意見が寄せられたことから、令和5年度の実験では歩行者空間を拡張して関係事業者を増やしたとのことである。

また、本年度の実験で設置されたパークレット（車道の一部に造られた歩行者のための滞在空間）は、社会実験終了後も引き続き設置されることとなり、今は固定式の椅子やテーブルのほか、市の情報発信のための「メディアボード」が置かれている。

#### ・今後の展望等について

新潟市では、実験、検証、改善のサイクルを繰り返しながらこれまで道路空間利活用に係る事業を進めて来られており、令和5年度では、これから社会実験の際の周辺道路への影響調査の結果をまとめられるほか、社会実験の成果や課題を踏まえて道路空間の再構築を検討し、持続可能な仕組みづくりを進めたいとのことであった。

#### ・所見

新潟市は、駅から大通りに沿って3kmほど進んだ場所に市役所があり、その間、駅前のビジネスビル群、古町をはじめとする新潟中心商店街、裁判所などの公的施設が立ち並んでおり、「にいがた2km」はその都心軸の取組である。また、いわゆる車社会の地方都市であり、公共交通としては路線バスとともにBRTが導入され、乗客の多い路線においては連節バス「ツインくる」が走行している状況である。

本市も駅前から市役所までの約2kmの間、駅前の商業施設等ビル群、繁華街の柳ヶ瀬商店街、裁判所や検察庁等の公的施設が立ち並んでいるように、中心市街地としては新潟市との類似点も多い。

今回視察させていただいた東大通は新潟駅前の風格のあるメインストリートであり、現在工事中の駅前「万代広場」の整備が完了すると、駅と直結することからも、「人中心の空間づくり」を目指し、道路空間利活用とともに回遊性向上を図っていききたいとのことであった。

本市においても、市の玄関口であるJR岐阜駅周辺、柳ヶ瀬、つかさのまち、岐阜公園周辺の4つのエリアの回遊性向上が重要な課題である。中心市街地においては、これまでトランジットモール交通社会実験や道路空間におけるオープンスペースの活用についての社会実験など、道路空間を生きた空間、魅力的な空間として活用するた

めの各種施策を行いながら、にぎわい創出に向けて取り組んできたところであり、同じく道路空間利活用等に取り組まれている新潟市の取組は大いに参考となるものであった。

## (2) 宇都宮市

人 口：513,435人

世帯数：236,712世帯

面 積：416.85km<sup>2</sup>

(令和5年9月1日現在)

### 【都市の概要】

宇都宮市は、関東平野の中北部に位置する中核市であり、その人口規模から北関東最大の都市と言われている。江戸時代には城下町として栄え、参勤交代や日光東照宮の造営などにより往来も多く、「小江戸」と呼ばれるほど繁栄した。明治17年に栃木県庁が置かれて以後、県内の政治経済の中心となり、昭和20年の空襲では市街地の大半が焼失したが、いち早く戦災復興土地区画整理を進め、全国でもまれにみる復興をとげた。昭和35年以降は、宇都宮工業団地や清原工業団地等の造成をはじめ積極的に工業振興策を推進し、また昭和59年に「宇都宮テクノポリス」の地域指定を受けるなど、産・学・住が有機的に結ばれたまちづくりが進められてきた。

交通網については、昭和47年に東北自動車道が、昭和57年には東北新幹線が開通するなど急速に整備され、特に、平成3年6月の東北新幹線の東京駅乗り入れにより宇都宮・東京間は53分となり、東京圏との交通は一層便利なものとなった。また、平成23年には北関東自動車道が全面開通し、南北・東西の動脈の結節点として、益々人やものの交流が盛んとなっている。

### ○宇都宮駅東口地区整備事業について

#### ・整備の基本方針等について

宇都宮市では、持続的に発展が可能な都市空間の在り方として「ネットワーク型コンパクトシティ（連携・集約型都市）」の形成を掲げており、宇都宮駅東口はその中核として高度な機能が高密度に集積することが期待されるため、「うつのみやの未来を拓く新たな魅力の創造・交流と賑わいの拠点」をコンセプトとして、この度、宇都宮駅東口地区整備事業に着手されたとのことである。

同地区は、本年度から運用を開始されたLRT（Light Rail Transit）の起点となる域内交通や広域交通の要衝であり、なおかつ、市有地であることから、整備においては公共と民間とが適切に役割分担しながら「人・もの・情報」などの交流と賑わいの創出、地域経済の活性化、都市の魅力向上などに資する多様で

高次な都市機能の導入を図ることで新たな都市拠点を形成することを目指された。

また、県都の顔として象徴的な都市空間とするため、LRT停留場や交流広場を中心とした施設配置により、街区のあらゆる場所からLRTが見えるようにするなどLRTとの一体感の醸成を目指されるとともに、周辺街区等と連携しながら、大規模の催事や多くの集客等を可能とする開発効果の高い地区整備を目指された。

#### ・事業の経緯について

実際の整備においては、北関東最大級の収容人数を誇る交流拠点施設、交流広場、高度専門医療の拠点病院、地域生活者や来街者が楽しめる商業施設や宿泊施設（複合施設棟）などを官民連携で整備された。その経緯については、以下のとおりである。

平成29年度 事業者募集（3月）

平成30年度 優先交渉者の決定（6月）、事業者の決定（1月）

令和 元年度 自転車駐車場の着工（10月）

令和 2年度 複合施設棟、高度専門病院、分譲マンションの着工（4月）  
自転車駐車場の供用開始（4月）、交流拠点施設の着工（10月）

令和 3年度 交流広場の着工（10月）、病院の開院（12月）

令和 4年度 分譲マンションの竣工（4月）、複合施設棟の開業（8月）  
交流広場・交流拠点施設の供用開始（11月）

#### ・事業の対象敷地について

整備対象は、宇都宮駅東口に直結する場所であり、駅の目の前の中央街区が①17,068.17㎡、②4,864.28㎡、また道路を挟んで対面に位置する南街区が4,024.37㎡であり、合計でおよそ2万6,000㎡の敷地面積である。

用途地域は商業地域、また中央街区については特例容積率適用地区となっている。容積率・建蔽率は、中央街区が600%・80%、南街区が400%・80%となっている。なお、同地区は宇都宮市景観計画における景観形成重点地区にもなっている。

#### ・宇都宮駅東口地区の現在と今後について

交流拠点施設は「ライトキューブ宇都宮」、交流広場は「宮みらいライトヒル」と名付けられ、令和4年の供用開始とともに多くの人々に利用されている。

同地区における整備については概ね完成しているが、中央街区の一部にて当初複合施設棟の建設を予定していたものの、現在計画を見直しているため空き地となっている部分があり、整備等については今後進められるとのことである。

#### ・「ライトキューブ宇都宮」「宮みらいライトヒル」について

「ライトキューブ宇都宮」は駅改札口から徒歩2分の距離に位置する大型コンベン

ション施設であり、全17室、収容人数は数十人から2,000人までと様々な規模の会議室等を備えている。また、全館機械換気可能な空調システムにより、新型コロナウイルス感染拡大後の新たな生活様式に対応した催事も可能となっている。特筆すべきは2,000人が収容可能な1,882㎡の床面積を有する大ホールであり、このホールは交流広場側の可動壁を開放することにより、交流広場と連続したスペースとして、さらに大規模かつ開放的な催事等を可能とする工夫が凝らされている。

「宮みらいライトヒル」は、「ライトキューブ宇都宮」の1階から3階までの各階層に配置された合計約6,000㎡に及ぶ広場である。1階及び3階広場についてはホールとの一体利用も可能な構造となっており、普段は一般市民等が集う憩いの場となっている。

#### ・その他

現段階での事業効果としては、コンベンション施設をよく利用してもらえていることや駅前の地価が上昇したことなどがある。国からは、社会資本整備総合交付金を受けているが、本市のような中心市街地活性化基本計画の認定を受けているわけではないとのことである。なお、運行開始したLRTは現在黒字であるが今後とも安定的な黒字化を図る必要があり、周知のため広報室を商業施設に設置するなどされている。

#### ・所見

宇都宮市は、宇都宮駅西側方面に市役所や繁華街が、宇都宮駅東側方面に複数の工業団地や住宅街がある。今年度運用を開始したLRTのルートはその工業団地と駅を結ぶものであり、宇都宮駅前東口地区はその終着地（今後は、西側方面にも延線予定）として、また、首都圏へ向かう人・訪れる人の玄関口として、大変立派な公共施設・民間施設が整備されていた。

その中心に配された交流拠点施設「ライトキューブ宇都宮」には国立競技場の設計を手掛けられた隈研吾氏も携われ、それぞれの部屋にコンセプトがあるように、デザイン性と実用性を兼ね備えたものとなっていた。同じく、屋外の交流広場「宮みらいライトヒル」も「ライトキューブ宇都宮」、LRT、宇都宮駅との一体性を重視したデザインと構造になっており、市民が集う広場として、居心地のよい空間となっていると感じられた。

本市においては、これまで岐阜駅周辺整備事業として、駅前広場や歩行者用デッキの整備などを行い、これからは岐阜駅北中央東地区及び中央西地区市街地再開発事業が進められようとしているところである。同地区は岐阜駅の正面に位置し、まさに岐阜市の玄関口であり、ここに整備される建築物は岐阜の顔となっていくことから、同じく、駅前の玄関口に位置する場所において、地区整備事業に着手され、これを遂行された宇都宮市の取組は大いに参考になる事例であった。

● 新潟県新潟市視察（令和5年10月19日）  
「「にいがた2km」における道路空間利活用について」



● 栃木県宇都宮市視察（令和5年10月20日）  
「宇都宮駅東口地区整備事業について」

